

# 着色食品の選択要因

—特に天然着色料志向について—

佐藤ひろみ

## Survey on Principal Attitude in Selecting Dyed Food

—Specific Aspects on Intention for Naturally Coloured Foods—

Hiromi Sato

Recently, the rejection against tar synthetic dyes is common among consumers, which let them tend to select natural dyes. Especially in the markets, labels indicating the use of natural dyes such as confectionery, cold sweets and refreshing drinks show the gestures in order to induce the customer's interest, especially of housewives.

This study consists of sensory test and questionnaires investigation with 40 of housewives in Koshigaya City, Saitama Pref. The survey conducted sensory test consists of: 1) selection test of organic function using dyed jelly, 2) enquete on selection of dyed food.

As results the attitude for the intention of natural dyes is influenced both by sensual factor and cognitive frame of reference learned prejudice. The latter is considered to be important for preconception in present society.

### はじめに

犬や猫が食物を摂取する順序は、まず最初に食べ物の臭いを鼻でかぎわけ食するのに適当か否かを嗅覚で判断するように、多くの動物は食物摂取のオ一段階の判断ルートとして各々特有の感覚を持っている。

人間の場合は知覚に重点がおかれ、それが食物選択のオ一の判断ルートとなる。とくにその中でも食品に着色される色彩の選択については有害性や食欲との関係において重要な意味をなしている。われわれが日常なにげなく「おいしそうな色」とか「毒々しい色」などという言葉を使っているが、食物の色がいに味覚や食物摂取の判断に影響を及ぼしているかがうかがえる。

そうした食品の色に対する価値判断や嗜好性は、一般に習慣的なものと言われているが着色食品における色彩選択については必ずしも習慣的なものではなく、最近では従来の合成タール系着色料に対する拒否反応がみられそれが消費者を天然物志向へと走らせている。

とくに市場では菓子類、冷菓、清涼飲料類などに天然着色料（天然色素）使用の表示が目立ち、子供の食生活の安全を切望する主婦層の購売欲をさそっている。しかし天然色素はわが国では現在食品衛生法の規制対象外に置かれており、その安全性についての十分な検証がなされてないまま安易に使用されているのが実情である。

このような現状をふまえて本研究では(1)着

表1 CDテスト用の着色ゼリーに使用した着色料

着色料色調	合成着色料			天然色素		
	No.	略称	C	No.	略称	D
透明色	0	B1-0	ゼラチン	0	B1-0	ゼラチン
赤色系	S-1	R-3	エリスロシン	N-1	R-T33	モナスコルブリン
赤色系	S-2	R-102	ニューコクシン	N-2	R-300	モナスコルブリン
黄色系	S-3	Y-4	タートラジン	N-3	Y-T1	クチナシ
黄色系	S-4	Y-5	サンセットイエロー-FCF	N-4	Y-20S	ベニバナ
緑色系	S-5	G-3	ファーストグリーンFCF	N-5	G-7S	カロチノイド系クロシン
青色系	S-6	B-1	ブリリアントブルーFCF	N-6	B-23	カロチノイド系クロシン
橙色系	S-7	R-102	ニューコクシン	N-7	R-T33	モナスコルブリン
		Y-4	タートラジン		Y-T1	クチナシ

※ 略称：R-赤色，Y-黄色，G-緑色，B-青色  
N-Natural food dyes S-Synthetic food dyes

※CDは着色濃度によってCD<sup>+1</sup> CD<sup>+2</sup> CD<sup>+3</sup>の3段階からなる

CD<sup>+1</sup> < S 0.005%  
          < N 0.05 %  
CD<sup>+2</sup> < S 0.025%  
          < N 0.25 %  
CD<sup>+3</sup> < S 0.05%  
          < N 0.5 %

色ゼリーを用いた官能選択テスト，(2)着色料についての意識に関する質問紙テストを実施しこれらの結果より着色食品の選択要因を分析した。また二者を関連させ特に天然着色料選択要因について検討し，食物の色彩選択における生活衛生上（天然着色料志向）の問題点究明の予備的研究としたい。

### 研究方法

1. 着色ゼリーについての官能選択テスト
2. 着色食品についての質問紙テストの2方法からなる。1, 2テスト併用の対象者は越谷市在住の主婦40人。質問紙テストの対象者は936人である。ここでは質問紙のみの対象者については本サンプルの主婦40例の分析の参考にする程度にして，次報に譲ることとする。

調査期間は57年5月～7月。ゼリーの選択テストについては一人ずつ面接で行ない，質問紙は選択テスト終了後記入するという順序で行なった。

1. 着色ゼリーによる選択官能テストは次の4種からなる。(表1, 表2参照)

ABは関連テスト(質問紙)として単純に各色彩の好悪を一般色名(文字)により選択するものである。

CDは研究室で本テスト用に作った3段階濃度の着色ゼリーによるもの。Eは一般に市販されているカップゼリーによるもの。Fは市販のゼリー菓子による選択によるものである。CDについては標準の合成着色料(東京化成

製)天然着色料(S化学，I化学より入手したもの)を各々3段階の濃度別にゼリーに着色した。着色したゼリーは表1のように赤色系2，黄色系2，緑色系1，青色系1，橙色系1であり，現在市販されているゼリーの着色を網羅するように選択した。さらにこれらは天然着色料と合成着色料使用の各々2系列の着色ゼリーに分けて配列し官能テストに採用した。

Eについては最近大手マーケットで市販されているものを使った。色調は表2-②に示す赤紫色系2，赤色系1，黄色系1，緑色系1について合成着色料使用，天然着色料使用表示のあ

表2-① 着色ゼリーの好悪選択結果：CD

テスト 着色料系列 使用系列 濃度	(好)分布						(嫌)分布						
	CD			CD2			CD			CD2			
	知らせる前	後		知らせる前	後		知らせる前	後		知らせる前	後		
種類	+1	+2	+3	+1	+2	+3	+1	+2	+3	+1	+2	+3	
C 合成着色料使用ゼリー	BI-0		6	14	10	11		0	0	3	0	0	
	S-1	10	4	2	0	1	1	0	0	0	2	6	5
	S-2	7	3	4	0	0	0	0	0	0	1	2	0
	S-3	1	2	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	S-4	0	3	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	S-5	2	0	0	0	0	0	1	3	2	12	12	22
	S-6	0	0	0	0	0	0	8	3	15	17	18	11
	S-7	4	6	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0
TOTAL	24	20	10	1	3	5	19	6	17	32	38	38	
D 天然色素使用ゼリー	N-1	1	0	4	4	5	4	12	22	2	0	0	0
	N-2	5	0	2	2	4	3	0	0	0	0	0	0
	N-3	3	6		6	5	6	0	0	0	0	0	0
	N-4	1	3	5	7	3	3	0	0	0	2	0	0
	N-5	3	0	0	3	3	3	4	0	0	3	0	0
	N-6	3	0	0	2	2	0	0	12	21	0	2	2
	N-7	0	7	5	5	5	5	0	0	0	0	0	0
	TOTAL	16	16	16	29	27	24	16	34	23	5	2	2

※S-1～N-7は表1と同じ

単位(選択者例数)

表2-② 市販の着色カップゼリー好悪選択結果：E

着色料 色調別	合成着色料・表示のゼリー				天然色素・表示のゼリー			
	サンプル No.	定 性	(好)	(嫌)	サンプル No.	定 性	(好)	(嫌)
赤紫色系	S-1	R-2・B-1	2	2	N-1	ブドウ果皮エニン	3	1
赤紫色系	S-2	R-2・Y-4・B-1	1	3	N-2	モナスコルブリン	4	1
赤 色 系	S-3	R-2	1	2	N-3	モナスコルブリン	3	1
黄 色 系	S-4	R-105・Y-4	5	0	N-4	クチナシ	20	0
緑 色 系	S-5	G-3・Y-4	0	25	N-5	カロチノイド系クロシン	1	5
	TOTAL		(9)	(32)	TOTAL		(31)	(8)

※ 着色料の種類は定性分析(ペーパークロマトグラフィ法及び、ホシュロム光電比色計による波長測定)により確認した。

表2-③ 市販ゼリー菓子の好悪選択結果：F

サンプル No.	スーパー マーケット	色の濃さ	色 調	色 の 種 類	香り	(好)	(嫌)
S1-IY	国内	+2	淡 い (透明)	赤 黄 緑 青	弱	6	0
S2-MS	カナダ	+4	非常に濃い(不透明)	赤 黄 緑 黒*	強	0	28
S3-MS	カナダ	+3	濃 い (不透明)	桃 黄 茶* 黒*	強	1	22
S4-MS	カナダ	+1	淡 い (不透明)	橙, 薄紫・薄黄	中	33	0

※ (+1<+4高濃度) (\*印の色は選択者全員が強く拒否した)

るものを使った。

Fについては表2-③のようである。1は国内の大手マーケットで市販されているゼリー菓子の代表的なもの、2,3,4はカナダやヨー

表2-④ 色彩名についての好悪選択結果：A B

色彩交字	平均 得点	非 や ふ や 非 常 や つ や 常 に に う や に 嫌い 1 5 好き				
		1	2	3	4	5
1 赤 紫 色	2.1	14	14	7	3	1
2 赤 色	2.5	8	11	12	4	3
3 黄 色	2.7	6	12	14	3	3
4 橙 色	2.9	5	10	11	11*	3
5 緑 色	2.5	7	15	8	7	2
6 褐 色	2.1	14	14	7	2	2
平均	2.5▲					
7 オレンジ色	3.4	1	6	11	15*	6
8 グレープ色	3.1	2	9	11	13*	3
9 ストロベリー色	3.2	2	9	12	11*	4
10 メロン色	3.2	1	11	10	12*	5
平均	3.2▲					

単位 (例数)

※ 平均得点 =  $\frac{\sum_{i=1}^5 (\text{好悪得点}(1\sim 5) \times \text{その時の人数})}{\text{総人数}(n=40)}$

ロッパに市場を持つ大手マーケットで市販されているものの4種類を採用した。

選択方法はCD, E, Fについて好き嫌いの判断で行ない、官能テスト用として用意した記録表に好(O) 嫌(X)により対象者が記録するという方法で行なった。

CDにおいての選択法は3段階の濃度別、着色料の種類別(合成・天然)で好きなもの各々2つずつ、嫌いなもの1つを選択し、さらに濃度別に天然、合成を分けずに全体として同様に選択させた。

Eでは使用着色料の種類別(合成・天然)の表示を選択者にみせないで全体としての好悪を選択させた。

2. 着色食品についての質問紙テストは、次回報告予定の調査表の中から着色料の意識に関するものだけをピックアップした。質問項目は次の通りである。(Q1, Q2, Q3, Q6, Q8 Q11, 後述II-1参照)

### I. 官能テスト結果による天然着色料志向の分析

#### I-1. 着色ゼリーによる官能テスト結果：CD

天然着色料志向(天然色素志向, 以下天然色志向と略す)の要因をみるために、まずテ

スト用に着色したゼリーについての好悪選択について、天然着色料、合成着色料使用系列を知らせない時の好悪の分布と、知らせた後の好悪の分布の変化をみたのが表2-①である。知らせない時の好(○)分布は、合成着色料使用ゼリー-天然着色料使用ゼリーに分布しているが、濃度が濃くなると天然着色料に多くなる傾向がみられる。知らせた後の分布は+1、濃度ではそれほど大きな差はないが+2、+3濃度では明らかに天然着色料を選択しており、とくに+2濃度では圧倒的に天然着色料を選んでる。また×(嫌)の分布についても知らせた後では合成を嫌うものが天然の過半数を占めている。このことより天然着色料のものがよく、合成のものが悪いという認知枠(先入観)がはっきり読みとれる。

### I-2. 市販カップゼリーにおける好悪選択結果:E

それでは先入観以外に直接感覚的に天然のものを選ぶ傾向は認められないのであろうか。Eは市販のカップゼリーの表示を選択者にみせないで好悪を判断させたものである。S群は合成着色料使用のゼリーでそれに対応した色の天然着色料使用のゼリーをN群として表2-②に結果を示した。天然、合成の区別を知らせないのに合成を拒否し、天然を選ぶものが多い。(また天然、合成ともにカップゼリーが果物や果汁を加えて作られるイメージが強いいためか、最も身近かなオレンジ色を好む傾

向がうかがえる。)

以上により直接感覚的にも天然着色料使用のものが選ばれるということが示唆される。

(注:但しCDのゼリーにおいて知らせない時に合成のものを選ぶ傾向が多いので上述の結果はまだ検討の余地がある。しかしCDテストの着色ゼリーは市販のカップゼリーのゼラチン濃度の2倍濃度であり後述するFのゼリー菓子に近いものであること。そしてゼリー菓子が従来の食品のイメージでは、カップゼリーのように果汁や果物で着色されているものが少なく、色の美しいものという観念があることなどによるものと思われる。これらがカップゼリー選択での天然志向との差であろう。)

### I-3. 市販ゼリー菓子における好悪選択結果:F

結果は表2-③のとおりである。Fの市販ゼリー菓子はいずれも合成着色料使用のものであるが好みの選択が(4)に集中している。他の3点がみるからに合成着色料で着色されているような鮮やかな色であるのに(4)は色調もくすみ、色、形、香りがオレンジやグレープ、パイナップルなどの果物を連想させるものであり、天然のものに近い合成着色料の着色が感覚的に選ばれやすいことを示すものと思われる。但し、(1)のゼリー菓子の選択が比較的多いのは、色がソフトで透明感があり、国内のゼリー菓子としては一般的なものであり、生活習慣上他の2、3に較べて抵抗なく受け入

表3 CD, CD2によるパターン分類と関連テスト項目との関係

(Q8-2, Q6, Q11, E, F-(4), Q3)

質問紙 CD, CD2 テストによる パターン分類	天然着色料の体への 影響 (Q8-2)			着色食品購入の場合(Q6)				子どものおやつ購入の場合 (Q11)			
	ある	わからない	ない	天然のもの を買う	合成のもの を買う	どちらも 買わない	どちらも 買う	天然のもの を買う	合成のもの を買う	どちらも 買わない	どちらも 買う
a群・(感覚派) n=16	0	15	0	13	1	2	0	12	0	1	3
b群・(知識派) n=13	0	4	9	10	0	2	1	6	0	4	3
c群・(非天然派) n=11	6	5	10	10	0	0	1	6	0	2	3

  

	市販カップ ゼリーテスト(E)		市販ゼリー菓子 の好悪(F-4)		市販食品における着色料使用の判断(Q3)				
	天然型	非天然型	(好)		気に しない	表示確認	色の濃さ	色の種類	自然色 への近さ
a群	13	3	16	4	1	8	14	2	13
b群	19	4	10	2	0	10	9	1	2
c群	8	3	7	1	0	7	4	0	2

(E)天然型:天然着色料  
使用ゼリーの選択数  
-合成着色料使用ゼ  
リーの選択数 $\geq$ 2  
非天然型: <2  
CD2:CDテストにお  
いて合成着色料,天然色  
素の使用区別を対象者に  
知らせた後,CDと同様  
にテストしたものと

単位(例数)

れられるということも考慮すべきかもしれない。

#### I-4. 調査表Q17における着色ゼリーの色彩名についての好悪選択結果：AB

ABの結果を参考までに述べると表2-④に示すように、色彩名の言葉においてさえ天然の食品名をつけた言語の方が好まれることを示している。これは先入観の影響も受けた色彩言語感覚の問題であろう。

以上によって感覚的にも若干、天然着色料と合成着色料が弁別され天然に近いものが好まれる傾向にあること。しかし天然色に近いものが合成された場合にはやはりそれが好まれることが明らかにされた。さらに顕著な傾向として、天然着色料のものがよく合成のものが悪いという認知枠（先入観）や生活習慣（摂食経験）などの認知枠が重要なことが示唆された。

### II. 天然着色料志向における感覚と先入観の問題（質問紙テスト結果より）

#### II-1. 一般的傾向

天然着色料を好む感覚的要因と先入観の要因を分析する前に関連する質問紙テスト結果を一般的に略述する。「合成着色料は体に害があると思いますか」（Q8-1）という質問では合成着色料の危険はほとんどの人が感じている。（38/40）（前回調査結果においても同じ質問に対して71%（n=536）の人が「ある」と答えている。）これに対して「天然着色料の害」（Q8-2）については「ある」「ない」が若干で「わからない」が多くなっている。Q1-1, Q2-2は「食品を買う時に着色料の使用が気になりますか」「着色料の使用についてどうお考えですか」といういずれも着色料の使用に関する意識を問う質問である。Q1-1では圧倒的多数が「非常に気にする」（25/40）「やや気にする」（14/40）である。Q2-1は「なるべく使わない方がよい」（13/40）と「全然使わないようにするべきである」（19/40）が過半数を占めている。

Q6の「着色料を使用した食品では、合成着色料と天然着色料のどちらを買いますか」

では大多数が天然着色料使用のものを選び、Q11の「子供のおやつを買う時に、合成着色料と天然着色料使用のどちらを選びますか」という質問でも過半数が天然を選択している。但しQ11では「どちらも買わない」が（7例）無答（9例・ほとんどが「どちらも買う」という注釈をつけている。）が無視できない。なおQ3についてはII-3で述べる。

#### II-2. 官能テスト結果CDと質問紙による他項目との傾向

前節で提起した感覚的要因と先入感の双方の要因を弁別できる着色ゼリーによる官能テストの結果（CD）と質問紙の関連項目との傾向をみたい。まず表3は前述のCDのパターン分類とQ8-2, Q11, E（天然型・非天然型）、F-(4)との関係をみるものである。

CDのパターン（タテ軸）をa. 知らせないのに天然着色料で着色したゼリーを多く選んだ人のグループ（便宜上感覚派と呼ぶ）b. 知らせた後に多く選んだ人のグループ（知識派）、c. 知らせても多くない人のグループ（非天然志向派）に分類し、他の質問紙テスト結果（ヨコ軸）との関連をみた。（Q6は分布が偏っているため関連意味省略）

Q8-2との関連ではC群（非天然派）が「ある」「ない」「わからない」にかなり均等に分散しているのに対して、b群（知識派）では天然着色料が体に害がないとみている率が有意に高い。これが知識・先入観により価値感がはっきり現われているものといえよう。C群では「ある」と答えたものが数例みられ、a, b群の人とは異なる意識の高さを示すものかもしれない。なおa群（感覚派）は「わからない」が圧倒的に多く、今後の検討を要する。

Q11については「天然着色料使用のものを買う」人が多数である。とくにa群はb, c群に較べて「天然」を選択している率が高いようであるが例数の関係で結論はさしひかえたい。

次にEの市販カップゼリーの選択では、天然着色料使用の選択数と合成着色料使用の選択数との差が2以上のものを天然型選択者と

し、それ以外を非天然型選択者として関連をみると、やはりb群(知識派)に天然型が多いようである。しかしここでも例数が少ないので結論はさしひかえたい。

Fのゼリー菓子選択テストのうち、天然着色料使用のものに近い色で合成着色されているF-④についての好悪選択との関連ではa, b, c群の間に有意な差はみられない。

以上の関連性の結果からb群の知識派は天然着色料に関する項については肯定的傾向がみられ、天然志向の傾向が明らかである。また感覚派についても似かよった傾向がうかがえる。しかし非天然派は二者とも異なる傾向が認められ今後の検討を要するものと思われる。

### II-3. CD-2と質問紙Q3との関係

前節にひきつづきCD-2とQ3の関係をみる。Q3は「市販食品における着色料使用の有無を何で判断するか」をみたものである。前節で少なくともbの知識派については納得できる結果が得られたので、ここでは仮説の線に沿って結果を検討したい。

仮説A、『感覚派(a群)は(b, c群に較べて)視覚を通して感覚的に判断するのだから③「色の濃さ」や⑤「自然色との近さ」などの項が多くなるであろう』

結果は表3にみるように仮説が支持されている。但し②「表示で確認する」人も多いことは今後の検討にあたいする。

仮説B、『知識派(b群)は他群に較べ過去の学習経験や摂食経験により、表示や着色濃度に敏感であると考えられるので当然②「表示で確認する」の項が多いであろう。』

結果は表3にみるようにここでも仮説が支持されている。但し③「色の濃さ」で判断する人も多数である。知識派といえども色の濃さが重要な判断のポイントとなっているといえよう。

仮説C、『非天然派は天然着色料に対しても特に信頼を置いているわけではないと考えられるので仮説がたてにくい、b群とは異なった意味で②「表示で確認する」ことが多

いという仮説をとりあえずたててみた。』

結果は仮説を支持する傾向にあるが例数が少ないため不明な点を残している。

(注：b, c群で④「自然色への近さ」を判断の基準とする人が少ないのは、天然着色料(天然色素)が現実では必ずしも自然の食物の色に近いものではなく実際の市販食品でみるかぎりでは一般に色が非常に薄く、彩度も鈍く食欲をそそる色には至っていない。このことから⑤は判断の要素にはなり得ないのかもしれない。但しa群に多いのは感覚的に色が薄ければ選択するという傾向にあることから、色の濃さと関連して選択されたものと考えられる。)

### III. 着色ゼリーの色彩選択について

次に前述の40例の色彩(着色)選択についてCDテスト及び関連テストとしたABテストの結果を述べる。

CDテストにおける着色ゼリーの選択色については、表2-① +2, +3濃度の欄を参照。CDテストにおいて使用着色料の天然、合成別を知らせる前の選択結果(注：ここでは+1濃度は実際に市販されているものよりもかなり薄い着色なので省略し、+2, +3濃度における結果による)から以下の傾向がみられる。

合成着色料、天然着色料使用のもの双方で橙色系 <N7> が好まれ、また黄色系 <S3, S4> が好まれるという傾向にある。最も嫌われるものとしては天然着色料の青色系-N6があげられ次いで合成の緑色系-S5、青色系-S6である。

(注：CDテストにおいては一番濃い+3濃度では好きな色を選ぶ人数が減り、無着色ゼリーを選択する人が増えている。一方では天然の赤色系も選択されるようになる。しかし濃度が高くなると青色系<N8>は嫌う人が増加している)

以上のことより一般に食欲をそそる色といわれる(1)橙色系や歴史的に食品着色の色として昔から使用されてきた黄色系、赤色系が好まれ、従来から食物の色としてはタブーとされてきた(3)青色系が嫌われるという傾向がうかがえる。これらの結果は従来の研究結果に近いものである。

(注：市販のカップゼリーを用いたEテストにおいても圧倒的に橙色系のオレンジ色選択者が多い。市販のゼリー菓子を用いたFテストでは極端に濃く着色されたものの中でも橙色系のは選択者が多いという結果を得ている。)  
(表2-④参照)

関連テストABにおける一般色名の好悪選択(表2-④参照)についても「橙色系」という一般色名(文字)を選択する人が圧倒的に多く「赤色系」「黄色系」がそれに次ぎ、CDテストの結果と同じ傾向がみられる。但しABテストには「青色系」の項がないがこれにかわるものとして緑色系、褐色系が一般色名としては好まれない傾向にある。

(注：ABテストでは食品名称との対応で一般色名を選出したので、実際に食品の色として直感的に浮かばない青色系は省略している。)

#### 付記(1) 主婦一般の傾向からみた本サンプル 40例の特徴

ここでいう主婦一般とは前述の40例を含む主婦グループ、幼稚園児の母親、小学生の母親、市の生活クラブに所属する主婦 計936名である。(すべて越谷地区近辺) この主婦と本サンプルとの比較ではQ1-1では着色料の使用について「非常に気にする」人の率が他より高い。またQ2-1でも「むやみに濫用しなければよい」という意見が他に較べ少数例である。(但し小学生の母親も同様の傾向を示している) Q8-2, Q6, Q11においては、主婦一般の傾向と同じ傾向である。概して本サンプルは着色料に関する一般的な意識については他よりもいくらか高く、天然着色料についての一般的知識(Q8-2, Q6, Q11)については他と同様の傾向にあることが明らかである。従って40例は、主婦一般の傾向といえよう。

#### 付記(2) 主婦と学生との比較

本サンプルの主婦40例と同様に学生39例についてテストを行っている。その結果は別の角度から今後検討の予定であるが、官能テスト、質問紙テストの双方ともIIで述べた結果と同じ傾向を示している。従ってこの40例の主婦の特徴は学生を含めて、比較的一般の傾

向に近いことが明らかである。

## ま と め

40例の主婦による官能テスト、質問紙テストの結果より着色食品(ゼリー)における天然着色料志向の要因について分析してきたが、ここで今一度整理すると本稿では以下のような傾向が明らかとなった。

1. 官能テスト結果の分析からは感覚的にも若干天然着色料と合成着色料が弁別され、天然に近いものが好まれる傾向にあること。さらに顕著な傾向として天然着色料(天然色素)で着色されたものがよく合成着色料のものが悪いという認知枠(先入観)が重要なことが示唆された。
2. 天然着色料を好む感覚的要因と先入観の要因を明らかにするため、CD-2テスト(使用着色料を知らせた後の選択テスト)により、40例を感覚派(a群)、知識派(b群)、非天然派(c群)に分類し関連する質問紙テストの他項目との関連性をみたが、b群の知識派は天然着色料に関しては肯定的傾向がみられ、天然志向型の傾向が一貫して強調されていた。また感覚派についても似かよった傾向がうかがえるが、非天然派は二者とも異なる傾向が認められた。しかしここでは例数が少ないので今後の検討を要するものと思われる。
3. 着色ゼリーの色彩選択についても一般色名の選択テストでも橙色系が圧倒的に好まれ青色系が敬遠されるという従来の研究結果に近い傾向が示された。(但し着色選択の要因としては濃度の問題も見逃がせない。) 関連テストABの一般色名による選択でも橙色系が圧倒的多数である。さらにこの40例は一般主婦の傾向に近い結果であるといえる。
4. 本稿の40例は着色料に関する意識面については、次回発表の主婦一般の傾向に近いものである。また学生39例の結果もほぼ同様の傾向を示していた。

一般主婦や生活者の天然着色料志向は企業側の先取的PRなども加わって先走りの傾

向が著しいが、実際の生活者個人の選択要因を分析すると、科学的には根拠のない先入観や認知枠のもとに安易に天然着色料志向へと先走りしている姿勢が明らかとなった。今後の研究ではさらに天然志向選択要因に関する個々の認知枠や摂食経験について検討し、食品の色彩選択要因について追求するとともに生活者の摂食行動という観点から検討したい。

### 参 考 文 献

- (1)谷村顕雄他：天然着色料ハンドブック，光琳，1980.
- (2)佐藤ひろみ：人間科学研究第3集，1981.
- (3)藤田統訳：デズモントモリス著：マンウォ

- ッチング，人間の行動学，小学館，1980.
- (4)厚生省環境衛生局食品化学課：日本における天然食品添加物—昭和52，53年度実態調査結果から—，1979.
- (5)東京都都民生活局消費生活部：食用天然色表に関する調査，1978.
- (6)坂田種男：食品衛生研究，Vol. 29，No.11 1979.
- (7)神蔵美枝子：食品衛生研究，Vol.29，No.11 1979.
- (8)浅川浩司他：食品衛生研究，Vol.29，No2 1974.
- (9)安田侃他：食品と科学，1980.
- (10)日本薬学会編：衛生試験法注解，金原出版 467，1979.